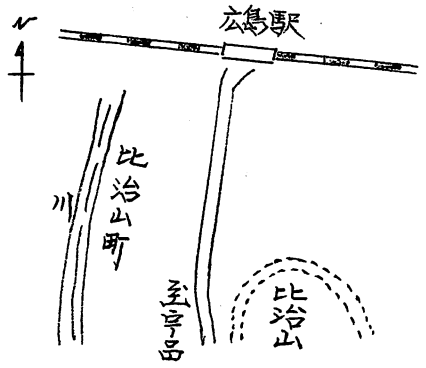
壊滅状態で、病死者の整理に追われて眠る暇も、場所（テント）もありませんでした。救護所には死んだ人や死に直面した人たちがゴロゴロ横たわっており「水をくれ、水をくれ」と声も切れ切れに叫んでいました。原爆の灰と死体の臭いが、真夏の暑さとともに言いようのない悪臭になり、食べ物ものどを通らない状態で、生き地獄そのものでした。

◎ 被爆場所の略図（入市）



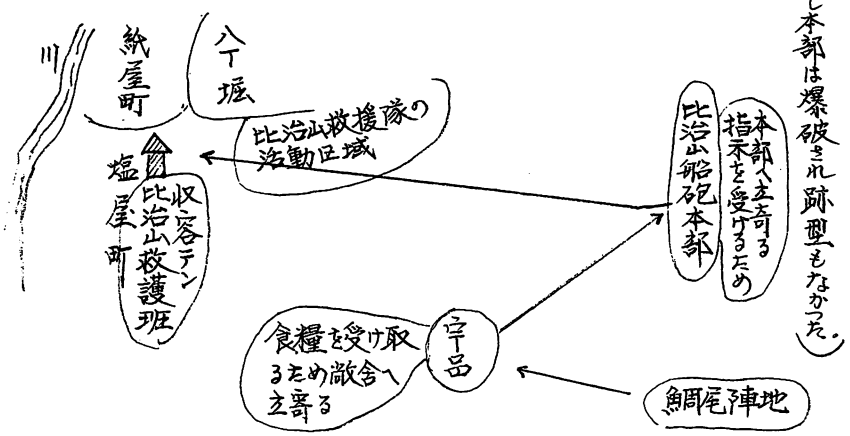
宇品から比治山まで徒歩、塩屋町の臨時救護所の警備と患者救援のため派遣

◎ 爆心地方面に立ち入るまでの行動

鯛尾陣地（8月7日早朝）—軍の舟艇→ 宇品港 ＝ 司令部

—徒歩→ 宇品の敞舎（入営当時の敞舎）—徒歩→ 比治山公園下 —徒歩→

比治山町 ＝ 比治山救護所到着 ——→ 塩屋町に入る。

◎ 爆心地に立入った時の状況と略図（1）

7日早朝鯛尾陣地を出発、比治山本部の指揮下に這入る。
また紙屋町方面の比治山救護班の収容テントへ向う。
此処で不眠不休の救出作業が続いた。